

孤独な顔： 暗黙の性格理論によるアプローチ

諸 井 克 英

1. 問 題

孤独者に関する認知の特徴

孤独感が対人関係の不全に由来するならば、孤独に陥っている者が、日常の相互作用の中で、他者にどのような認知を抱き、どのような行動を示しているかを明らかにすることは重要である。それとともに、孤独者が他者からどのように認知されているかという問題も取り組まれるべきである。というのは、他者との相互作用の中で、相互作用パートナーに生じた否定的な認知は、孤独者に対する拒絶を生じる原因となるからである。

たとえば、Williams & Solano (1983)は、孤独者の営む交友関係の非対称性を報告した。研究では、男女大学生に大学の友だちを10人まで挙げさせ、それぞれに対する親密さを評定させた。その後、挙げられた友だちに実際に接触し、同様の質問紙を実施した。被験者が上位(1-3位)に順位づけした友だちが被験者に対して与えた順位と被験者自身の孤独感との間には、有意な負の相関がみられた。つまり、高孤独者の場合、好意の返報性が認められなかった。

孤独者が未知者からどのように認知されるかを検討した研究がいくつかある。これらの研究をみると、孤独者が何らかの点で低く評価される傾向があることを示す研究知見と、孤独者に対する弁別的認知が生じないことを示す研究知見とが混在している。

Jones, Freemon, & Goswick (1981)は、第2研究で、男女大学生を被験者として、異性未知者との15分間の会話に従事させた。その際、UCLA 孤独感尺度に基づき被験者が高孤独者と低孤独者に選別された。相互作用後の評定をみると、高孤独者が相互作用パートナーから非好意的な評価を受けることはなかった。Chelune, Sultan, & Williams (1980)は、女子大学生に、心理学実験を待つ

ふりをしている男性サクラと5分間の会話に従事させた。あらかじめ被験者の自己開示水準と孤独感を測定し、独立変数とした。相互作用場面の観察者に被験者の社会的技能を評定させたところ、自己開示の効果のみが認められた。また、被験者の同輩に被験者の社会的技能の評定をさせても、同様な効果のみが得られた。

大学の夏季セッションを利用した Jones *et al.* (1981)による第4研究では、セッション参加学生相互の対人認知が査定された。セッションの初期には、高孤独者が他者から低く評価され、ソシオメトリーによる地位も低い傾向がみられたが、7週後にはこれらの関連は消失した。Jones, Sansone, & Helm (1983)は、男女大学生を15分間の相互作用に従事させたところ、高孤独者が低い自己評価をすると相互作用パートナーが思い込む傾向が認められた。Spitzberg & Canary (1985)は、男女大学生に15分間の相互作用をさせ、相互作用管理、他者志向性、および表現力という点での相互作用パートナーの能力を評価させた。孤独感が高い者は、相互作用パートナーによって、これらの能力について低く評価された。

Solano & Koester (1989)は、男女大学生にさまざまな社会的状況を呈示し、その状況に自分自身がいると想像させ、自分の反応を自由記述させた。その自由記述反応の社会的適切さを別の被験者に評定させた。この他者による社会的技能評価が低い場合には、本人の孤独感が高い傾向があることが見出された。Bruch, Kaflowitz, & Pearl (1988)も、女子大学生について同様の仕方で検討し、同じ傾向を得た。

以上のことから、研究で用いられた測度で一般的に孤独者に対する否定的評価が現われているわけではないので、孤独者が必ず対人的拒絶につながる評価を受けているとは結論できない。しかし、孤独者は、実際の相互作用の中で、確かにいくつかの点で否定的な評価をされている。このような否定的評価は、相互作用を営むうえで不利となる。

ところで、孤独者と相互作用している者が孤独者に対する否定的評価を形成するための重要な手がかりの1つとして、相互作用中の孤独者自身の行動を挙げるができる。たとえば、Solano, Batten, & Parish (1982)は自己開示の不適切さ、Jones, Hobbs, & Hockenbury (1982)は会話スタイルの不全を指摘している。未知者同士の初期相互作用を考えた場合、相手に対する評価は、相手のとる行動に加え、相手の相貌的特徴によっても規定されるだろう。したがって、孤独者がもつ何らかの相貌特徴が認知者に否定的評価をもたらすとすれば、

孤独者は、初期の相互作用において不利な立場におかれ、対人関係上の不全を経験しやすくなると思われる。このような推測は、対人関係での身体的外見の重要性を系統的に概観した Berscheid & Walster (1974)の研究と一致するだろう。

暗黙の性格理論： 相貌と性格との仮定された関連

Bruner & Tagiuri (1954)は、Asch による印象形成実験を検討する中で、次の可能性を指摘した。彼らによれば、Asch が主張するように全体的印象の形成を仮定しなくても、“冷たい”人物だと分かっただけで、その人物が不親切で攻撃的であると思いつくかもしれない。つまり、人は、さまざまな特性間に関わる結びつきに関する何らかの考えを抱いており、それが他者を認知する際にも適用される。人のもつ特性間の結びつきに関する信念体系は、一般の人々によって抱かれており、暗黙の性格理論(implicit personality theory)と呼ばれる。手相や血液型による性格診断も、それが真実かどうかは別にして、暗黙の性格理論の構成要素となる。

Bruner & Tagiuri (1954)による暗黙の性格理論の概念の提起以来、膨大な研究が出現している。ここでは、相貌特徴と性格特性との仮定された関連について行われたわが国での研究をみよう。

林・津村・大橋(1977)は、4名の女子大学生の顔写真を女子大学生に呈示し、相貌特徴の知覚と性格特性の推測との関連を検討した。4名の顔写真は、先行研究(大橋・三輪・長戸・平林,1972)によって、相互に異なる印象をもたらすことが確認されている。各刺激人物についての相貌特徴と性格特性が評定され、因子分析によって、相貌特徴5因子と性格特性5因子がそれぞれ抽出された。正準相関分析によると、“口が小さくて下がり目”や“口元のしまりのなさ”という相貌特徴から“非活動性”が推測され、“ほっそりして目鼻立ちの整った”や“口元のしまりのなさ(負)”から“とりつきやすさ”や“社会的望ましさ”が推測されることが認められた。

鈴木・渡辺・足立(1988)は、犯罪者のモンタージュ写真作成時に顔の形態についての記憶再生が困難であっても顔の印象についての記憶が鮮明であることを踏まえ、林ら(1977)と同様の図式で研究を行っている。ただし、写真の刺激人物は男性である。因子分析によって、相貌特徴4因子と性格特性4因子が抽出された。ただし、モンタージュ作成に対する有効性という実用上の目的のため、相貌特徴と性格特性との関連の分析は、残念ながら項目水準での相関にと

どめている。

女性の顔の認知に関する日韓比較を試みた大坊・村澤・趙(1994)による研究では、予備調査によって3水準の美しさに選別された女子大学生の顔写真スライドを、女子短大生に呈示し、魅力や性格印象に関する評定を行わせた。この研究では、相貌特徴の知覚よりも、実際に計測された顔の形態指標が用いられた。日本人被験者では、大きな目、小さな唇、短いが奥行きのある唇上部、短いあごが美しさの印象をもたらした。

顔写真ではなく、漫画や相貌特徴語を呈示することによっても、相貌特徴と性格特性の関連が検討されている。林(1978 a)は、漫画の登場人物 90 名を選定し、女子大学生に呈示し、林ら(1977)と同様に相貌と性格特性に関する評定を行わせた。因子分析を試み、相貌特徴 4 因子と性格特性 3 因子が得られた。重回帰分析の結果は、相貌特徴と性格特性との明確な関連を示した(“目もとの鮮明さ”, “眉と口もとの鋭さ(負)” → “個人的親しみやすさ”; “眉の太さと顔のつくりの荒さ”, “目もとの鮮明さ”, “眉と口もとの鋭さ” → “力本性”; “顔の丸さと凹凸のなさ” → “社会的望ましさ”)。大橋・長戸・平林・吉田・林・津村・小川(1976)の研究では、女子大学生を対象として、呈示された性格特性語から相貌特徴を推測させ(調査Ⅰ), さらに、呈示された相貌特徴語から性格特性を推測させた(調査Ⅱ)。因子分析によって、相貌特徴 5 因子と性格特性 3 因子が抽出された。尺度項目間の相関をこれらの因子別に整理して検討したところ, “線の鋭さ”と“とりつきやすさ”, “目の大きさ”および“華奢”と“消極性”, “口もとのしまりのなさ”と“知性のなさ”との間で、強い関連がみられた。

本研究の目的

本研究では、孤独感に関する研究や暗黙の性格理論研究(とりわけ、相貌特徴と性格特性との仮定された関連を検討した研究)を踏まえ、実際に孤独感に陥っている者の顔が相貌特徴の知覚や性格特性の推測の点で弁別的に認知されるかを検討した。その際、Fig. 1 に示す作業モデルを設定した。

また、基本的な研究方法として、林ら(1977)の方法を参照した。しかし、彼らの研究では、a) 女性被験者が女性写真を評定する条件しか用いられていない、b) 4 名の刺激写真しか用いられていない、という点で不十分であると思われる。a) については、暗黙の性格理論が知覚対象の性別を超えて存在することも考えられるが、対象の性別によって用いられる暗黙の性格理論が異なるとも

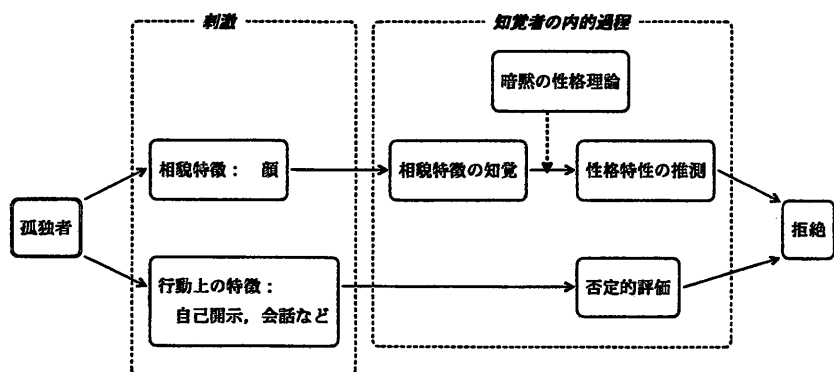


Fig. 1 孤独者の顔の知覚に関する作業モデル

思われる。本来は、被験者の性別と刺激人物の性別を同時に操作することが望ましい。しかし、本研究では、被験者の都合で、刺激人物の性別のみを操作した。b)については、林ら(1977)の研究で用いられている4枚の写真は、先行研究(大橋ら,1972)で90名の写真から相互に印象の異なるとされたクラスターの中からそれぞれ選ばれた。統計的には妥当な手続きといえるが、実際に論文に載せてある写真を見ると、典型的な顔立ちのパターンであるとはあまり思えない。本研究では、あえて刺激写真の予備的分類は行わず、できるだけ多くの人物の写真をもそのま対象とした。

II. 方 法

調査の実施および被験者

常葉学園富士短期大学で“心理学”を受講している1・2年生を対象に調査を実施した(2クラス)。調査は、印象形成に関する基礎的データ収集のためとして、講義時間を利用して行われた(2クラスそれぞれ、1993年11月8日、15日)。各被験者に刺激人物の写真1枚と質問紙の入った封筒を無作為に配付し、一斉に行った。男子は少数のため分析から除去し、残りの女性のうち回答方法に誤りや脱落のない181名が分析対象とされた。

刺激写真の選定

静岡大学教養部の“心理学”の受講生を対象として、同一背景で胸より上の写真を撮影した(1988年と1989年の9月上旬)。なお、服装の効果を一樣にするためにエプロン状の布を首より下にあてた。このうち、a)無表情、b)眼鏡を着用していない、c)眉毛が前髪で隠れていないことなどに留意して、176名の写真を選定した。当該の被験者に男性写真と女性写真のいずれが配付されるかは無作為に行われた。

彼らは、別の研究目的のために、1年間にわたって孤独感と自尊心も測定された(諸井,1991,参照)。ここでは、写真撮影の1カ月後に評定された孤独感と自尊心の得点を利用した。孤独感については、改訂 UCLA 孤独感尺度(Russell, Peplau, & Cutrona, 1980)の20項目に対する回答を次の基準で行わせた。まず、“ここ2週間の状態”という基準で20項目それぞれに4点尺度で評定させた。次に“この1年間の状態”という基準で同様に回答させた。孤独感が高いほど高得点になるようにし、20項目の合計得点をそれぞれで算出し、前者を短期的孤独感得点、後者を長期的孤独感得点とした。自尊心については、Rosenberg(1979)の自尊心尺度(10項目)を用い、5点尺度で評定させた。自尊心が高いほど高得点になるようにし、10項目の合計得点を自尊心得点とした(各尺度の信頼性については、諸井(1991)を参照されたい)。

なお、10月上旬の質問紙実施時に参加していない者が14名いたが、2名については7月時点、12名については11月あるいは12月時点のデータを利用した。

質問紙の構成

質問紙は、a)刺激人物の属性上の特徴評定、b)相貌特徴尺度、c)性格特性尺度、d)部位の重視度評定から構成される。

(1)刺激人物の特徴

刺激人物の性別と年齢を推測させ、刺激人物の既知についても報告させた。

(2)相貌特徴尺度

顔の特徴を表現するときに用いる言い回しに関する予備調査を、静岡大学教養部で“心理学”を受講する1・2年生を対象に実施した(静岡大学教養部“心理学”受講生：1989年12月上旬：179名<男子83名、女子96名>；1990年4月下旬：145名<男子62名、女子83名>)。調査では、まず、顔の全体的特徴と印象を表わす言い回しを自由記述させた。次に顔の部分に限定して同様に記

Table 1
相貌特徴尺度項目

1.	顔が大きい(5)-顔が小さい(1)
2.	顔が日本人らしい(5)-顔が日本人離れた(1)
3.	鼻が高い(5)-鼻が低い(1)
4.	おでこが広い(5)-おでこが狭い(1)
5.	顔が面長である(5)-顔が丸い(1)
6.	ほくろが目立つ(5)-ほくろが目立たない(1)
7.	鼻の穴が小さい(5)-鼻の穴が大きい(1)
8.	おでこが高く出ている(5)-おでこが平らである(1)
9.	顔の色が黒い(5)-顔の色が白い(1)
10.	えらが張っている(5)-えらが張っていない(1)
11.	鼻の先が丸い(5)-鼻の先が丸くない(1)
12.	目が丸い(5)-目が細い(1)
13.	顔の血色がよい(5)-顔の血色が悪い(1)
14.	あごがとがっている(5)-あごが丸い(1)
15.	鼻筋が通った(5)-鼻筋が通っていない(1)
16.	目が大きい(5)-目が小さい(1)
17.	ほっそりした(5)-ふっくらした(1)
18.	髪の毛がやわらかい(5)-髪の毛がかたい(1)
19.	鼻が大きい(5)-鼻が小さい(1)
20.	目がつり上がっている(5)-目がたれている(1)
21.	顔のほりが深い(5)-顔がのっぺりした(1)
22.	髪の毛がさらさらしている(5)-髪の毛がごわごわしている(1)
23.	ほおがこけた(5)-ほおがふっくらした(1)
24.	目じりが切れこんでいる(5)-目じりが切れこんでいない(1)
25.	顔が大人っぽい(5)-顔が子どもっぽい(1)
26.	眉が太い(5)-眉が細い(1)
27.	唇が厚い(5)-唇が薄い(1)
28.	両目の間隔が長い(5)-両目の間隔が短い(1)
29.	顔が整っている(5)-顔が整っていない(1)
30.	眉が八の字形である(5)-眉が逆八の字形である(1)
31.	口が小さい(5)-口が大きい(1)
32.	まぶたが二重である(5)-まぶたが一重である(1)
33.	顔の肌がきれい(5)-顔の肌が荒れている(1)
34.	眉が濃い(5)-眉が薄い(1)
35.	口もとがゆるんだ(5)-口もとがひきしまった(1)
36.	黒目が大きい(5)-黒目が小さい(1)

()内の数字は、各両極の得点を示す。

述させた。顔全体では、形態的特徴よりも内面的傾性を表わす反応が59%を占めており、日常的に顔の知覚が内面的傾性の知覚を伴っていることを示していた。部分に関する表現では、目や鼻に関する言及が多くみられた(それぞれ、34%,17%)。部位の場合にも、内面的傾性を示す反応が比較的多く現われた。

本調査では、この予備調査の結果に基づき、大橋らの先行研究も参照しながら、36項目から成る相貌特徴尺度を作成した(両極形容詞対5点尺度、Table 1)。なお、先行研究で用いられている尺度項目のうち、写真から判断するのが困難である項目を、意図的に排除した(“まつ毛の長い”、“歯ならびのよい”、“耳の大きい”、“背の低い”、“骨太の”)。得点は、尺度上の左側の極を5点とし、右側の極を1点とした。

(3)性格特性尺度

大橋ら(1973)の研究で使用された20項目を利用した。ただし、予備検討段階で対義語として被験者に感じられないことが分かった項目については、修正を

Table 2
性格特性尺度の項目

1.	卑屈な(5)-堂々とした(1)
2.	意欲的な(5)-無気力な(1)
3.	軽薄な(5)-落ち着いた(1)
4.	自信のある(5)-自信のない(1)
5.	親しみにくい(5)-親しみやすい(1)
6.	無分別な(5)-分別のある(1)
7.	社交的な(5)-社交的でない(1)
8.	心のせまい(5)-心のひろい(1)
9.	うきうきした(5)-沈んだ(1)
10.	近づきがたい(5)-近づきやすい(1)
11.	かわいらしい(5)-かわいげがない(1)
12.	消極的な(5)-積極的な(1)
13.	感じのよい(5)-感じのわるい(1)
14.	親切的な(5)-不親切的な(1)
15.	人のよい(5)-人のわるい(1)
16.	短気な(5)-気長な(1)
17.	責任感のある(5)-無責任な(1)
18.	慎重な(5)-軽率な(1)
19.	なまいきな(5)-なまいきでない(1)
20.	恥かしがりの(5)-厚かましい(1)

()内の数値は、各両極の得点を示す。

加えた(両極形容詞対5点尺度, Table 2)。得点化は, 相貌特徴尺度の場合と同様に行った。

(4)部位の重視度

被験者が刺激人物の性格を推測するときに重視した部位について尋ねた。(顔全体, 顔の上半分, 顔の中心部分, 顔の下半分, 髪, ひたい, 眉, 目, 鼻, ほお, 口, あご)。“かなり重視した<4点>～まったく重視しなかった<1点>”の4点尺度で回答させた。

なお, 項目順の効果を相殺するために, 相貌特徴尺度と性格特性尺度ではそれぞれ4タイプの質問紙を用いた。

III. 結 果

分析対象の選定

刺激人物の性別を誤って認知した被験者が5名いた(男性写真を女性と認知2ケース, その逆3ケース)。また, 刺激人物の年齢を過大あるいは過小評価した2名の被験者がいた(それぞれ女性写真で33歳, 15歳と推測)。これらの写真を再度吟味したが, 誤認知が起きる可能性があると判断できる写真であった。さらに, 刺激人物を知っていると答えた被験者が1名いた。本研究では, これらの被験者を除く173名の評定を分析対象とした(男性写真群73名, 女性写真群100名)。

各部位に関する重視度

被験者が性格を推測するときに重視した顔の部位については, 刺激人物の性別にかかわらず, 大まかに次の傾向がみられた。目(男性写真: $X=3.52$; 女性写真: $X=3.61$)や顔全体($X=3.42$; $X=3.55$)が重視され, 顔の上半分($X=2.90$; $X=2.99$)がそれに続く。あご($X=2.00$; $X=1.97$)やひたい($X=1.58$; $X=1.65$)はあまり重視されない。

各部位ごとに刺激人物の性差をみても, 眉のみで有意差が認められ, 男性写真のほうで眉が重視される傾向にあった($t_{(171)}=2.81$, $p=.006$)。

相貌特徴尺度と性格特性尺度に関する因子分析

2つの尺度について, 因子分析を行った。全体, 男性写真群, 女性写真群ごとに因子分析(主因子法, 直交回転)を行い, 初期固有値 ≥ 1.000 を満たす解をす

べて求め、それぞれで適切な解を検討した。その際、因子負荷量の絶対値が.400以上の項目を各因子の代表項目とし、因子の解釈を試みた。男性写真群と女性写真群で異なる構造が現われたので、以下の分析は、群別に行った。なお、採用因子解について、回帰法に基づき、因子得点を算出した。

(1)相貌特徴尺度

①男性写真群

13 因子解から 2 因子解までを検討したところ、7 因子解が適切であると判断された(初期説明率 52.2%,初期固有値 ≥ 1.528)。因子分析の結果を Table 3 に示す。

第Ⅰ因子、第Ⅱ因子、第Ⅳ因子、第Ⅶ因子は、顔の全体的特徴を表わす因子であった。第Ⅰ因子は、顔の凹凸を示す項目の負荷量が高いので、“凹凸のある顔立ち”と命名した。第Ⅱ因子は、各部位の大きさを表わす項目から構成され、“つくりの荒い顔”とした。第Ⅳ因子は、顔の大きさの知覚に関連した項目の負荷量が高いので、“こぢんまりした顔立ち”と名づけた。第Ⅶ因子は、顔の長さに関わる項目から構成され、“面長の顔”とした。また、第Ⅲ因子は、顔の全体的雰囲気に関わる因子である。目の大きさと血色のよさに関わる項目の負荷量が高く、“健康的な顔立ち”と名づけた。

第Ⅴ因子と第Ⅵ因子は、特定の部位の特徴に関わる因子であり、前者は“太い眉”、後者は“しなやかな髪の毛”とした。

②女性写真群

女性写真群でも、同様に、13 因子解から 2 因子解までが検討された。8 因子解が適切と判断された(初期説明率 52.8%,初期固有値 ≥ 1.574)。この結果を Table 4 に示す。

第Ⅰ因子、第Ⅱ因子、第Ⅳ因子、第Ⅵ因子、第Ⅶ因子は、顔の全体的特徴を示す因子であった。第Ⅰ因子や第Ⅵ因子は、顔の輪郭や部位の大きさに関わる項目の負荷量が高く、それぞれ、“ほっそりした輪郭”、“大きな部位”と命名された。残りの因子は、顔の全体的雰囲気を表わす因子といえる。第Ⅱ因子は“さわやかな顔立ち”、第Ⅳ因子は“大人っぽい顔”、第Ⅶ因子は“健康的な顔立ち”と名づけられた。

第Ⅲ因子、第Ⅴ因子、第Ⅷ因子は、特定の部位の特徴を表わす因子であった。それぞれ、“鮮明な目もと”、“太い眉”、“ハの字形の眉”とした。

Table 3
相貌特徴尺度に関する因子分析（主因子法，直交回転）の結果：
因子負荷量　—男性写真—

	平均値(SD)	I	II	III	IV	V	VI	VII	h^2
〔I. 凹凸のある顔立ち〕									
21. 顔のほりが深い	2.92(.80)	.691	.384	.321	-.019	.200	.050	-.014	.771
23. ほおがこけた	2.88(1.03)	.607	-.264	-.085	.209	-.115	-.054	-.066	.510
24. 目じりが切れこんでいる	2.84(1.01)	.551	-.058	-.082	-.079	-.070	.029	-.283	.406
3. 鼻が高い	2.90(.82)	.513	.161	-.029	.181	.117	.438	.091	.537
15. 鼻筋が通った	3.03(1.15)	.506	.001	.068	.191	.165	.073	-.001	.330
14. あごがとがっている	3.00(1.11)	.502	-.155	.080	.149	.094	.022	.280	.392
11. 鼻の先が丸い	4.12(.93)	-.344	.232	-.035	-.109	.162	-.082	-.093	.227
〔II. つくりの荒い顔〕									
27. 唇が厚い	3.59(.96)	-.090	.721	-.234	-.006	.063	-.088	.136	.613
31. 口が小さい	3.00(.97)	.095	-.667	.019	.126	.102	.192	.147	.539
7. 鼻の穴が小さい	2.93(1.03)	.252	-.506	.216	.094	.053	-.111	-.109	.402
9. 顔の色が黒い	3.70(.88)	.128	.474	.135	-.127	-.040	-.200	-.044	.319
19. 鼻が大きい	3.81(.83)	-.273	.420	.004	-.163	.229	.220	.032	.379
2. 顔が日本人らしい	3.90(1.00)	-.105	-.198	-.043	-.117	-.099	-.075	-.115	.094
〔III. 健康的な顔立ち〕									
16. 目が大きい	3.08(1.00)	-.087	-.252	.820	.172	.134	.120	.036	.807
12. 目が丸い	2.55(.87)	-.081	-.170	.627	.209	.114	-.054	.328	.596
13. 顔の血色がよい	3.49(1.03)	.040	.335	.539	-.038	-.097	-.108	-.218	.474
30. 眉が八の字形である	2.68(.81)	-.273	-.081	-.419	.080	.041	-.067	.073	.275
〔IV. こちんまりした顔立ち〕									
17. ほっそりした	2.99(1.12)	.321	-.132	-.075	.724	-.114	.117	-.035	.678
1. 顔が大きい	3.49(.87)	-.117	.224	-.170	-.719	.239	-.071	-.122	.687
29. 顔が整っている	3.11(.86)	.310	.013	.211	.429	.163	.132	-.229	.421
36. 黒目が大きい	3.48(.80)	-.039	-.096	.101	.418	.187	.175	.195	.299
〔V. 太い眉〕									
26. 眉が太い	4.19(.95)	-.024	.187	.018	.050	.666	-.068	.078	.493
34. 眉が濃い	4.44(.82)	.068	.034	-.026	-.025	.593	-.090	-.068	.371
32. まぶたが二重である	2.44(1.65)	-.017	-.090	.356	.130	.356	.131	.099	.306
33. 顔の肌がきれい	2.56(1.07)	.030	-.096	.131	-.010	.311	.032	-.057	.128
28. 両目の間隔が長い	3.21(.73)	-.088	.204	-.303	-.029	.310	-.039	-.077	.246
6. ほくろが目立つ	2.08(1.38)	-.054	-.085	-.037	-.059	.249	-.120	.225	.142
〔VI. しなやかな髪の毛〕									
18. 髪の毛がやわらかい	2.08(1.02)	-.092	-.274	.153	.187	-.303	.725	.042	.761
22. 髪の毛がさらさらしている	1.95(.83)	.166	-.203	.056	.010	-.144	.693	-.029	.574
4. おでこが広い	3.12(1.01)	.109	.129	-.036	.273	.096	.412	-.055	.286
〔VII. 面長の顔〕									
5. 顔が面長である	3.63(.98)	.064	-.021	.015	.149	.118	.048	.537	.332
8. おでこが高く出ている	2.04(.90)	.205	.129	-.039	-.114	-.224	.190	.495	.404
10. えらが張っている	2.81(1.19)	.132	-.035	-.053	.042	.312	.207	-.461	.376
35. 口もとがゆるんだ	2.86(1.10)	-.362	.229	-.130	-.054	-.058	-.298	.390	.448
20. 目がつり上がっている	3.00(.91)	.309	-.001	-.062	-.219	-.116	.121	-.311	.272
25. 顔が大人っぽい	2.86(.87)	.171	-.001	-.052	-.004	.250	-.050	-.283	.177
因子固有値		2.910	2.579	2.167	1.938	1.929	1.872	1.678	15.073

$N=73$

初期説明率：52.2%； 固有値 ≥ 1.528

Table 4
相貌特徴尺度に関する因子分析（主因子法，直交回転）の結果：
因子負荷量　－女性写真－

	平均値(SD)	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	h^2
〔I. ほっそりした輪郭〕										
23. ほおがこけた	2.39(1.04)	.749	-.124	.003	.095	-.074	-.051	-.073	-.033	.600
17. ほっそりした	2.67(1.03)	.747	.211	-.030	.113	.067	-.175	.050	.022	.654
5. 顔が面長である	3.33(1.14)	.637	-.090	-.203	.221	.059	.202	.017	.263	.618
14. あごがとがっている	2.62(1.11)	.524	.098	-.084	.002	-.068	-.111	.207	.059	.355
〔II. さわやかな顔立ち〕										
18. 髪の毛がやわらかい	2.48(1.11)	.170	.673	-.108	-.125	.004	.140	-.230	-.168	.610
29. 顔が整っている	3.17(.79)	-.212	.601	.112	.082	-.030	-.066	.200	-.087	.478
22. 髪の毛がさらさらしている	2.45(1.12)	.250	.507	-.073	-.134	-.086	.049	-.031	.083	.360
3. 鼻が高い	2.94(.80)	.103	.435	-.040	.276	-.267	.139	-.263	.117	.451
33. 顔の肌がきれい	2.96(1.33)	-.047	.417	.072	-.019	.023	-.068	.166	.049	.217
11. 鼻の先が丸い	3.89(1.14)	-.118	-.325	.111	-.220	.203	.316	.105	-.062	.336
〔III. 鮮明な目もと〕										
12. 目が丸い	3.11(.96)	-.148	.164	.727	-.002	-.041	.114	-.030	.014	.593
32. まぶたが二重である	3.15(1.78)	-.113	-.116	.673	.105	-.069	-.055	-.087	.008	.506
16. 目が大きい	3.56(1.01)	-.143	.100	.585	.100	.231	.335	.166	.133	.594
2. 顔が日本人らしい	3.89(1.03)	-.192	.142	-.525	-.126	-.036	.108	-.122	.156	.401
〔IV. 大人っぽい顔〕										
15. 鼻筋が通った	2.80(1.12)	.018	.383	-.213	.568	-.218	.008	-.055	.144	.586
25. 顔が大人っぽい	2.77(1.14)	.187	.029	.138	.563	.044	-.066	.019	-.022	.379
1. 顔が大きい	3.22(.77)	-.456	-.331	-.056	.548	-.064	.226	.045	-.035	.679
21. 顔のほりが深い	2.51(.81)	.064	.108	.301	.538	.094	-.101	.248	-.145	.497
24. 目じりが切れこんでいる	2.75(.98)	.074	.058	.025	.301	-.136	-.029	.157	-.205	.186
8. おでこが高く出ている	2.13(.92)	.071	-.059	-.019	.254	.078	-.082	.191	-.001	.123
6. ほくろが目立つ	1.91(1.29)	.011	-.056	.060	.144	-.008	.043	-.058	-.006	.033
〔V. 太い眉〕										
26. 眉が太い	3.21(1.00)	.028	-.131	-.011	.087	.779	.037	-.265	.067	.709
34. 眉が濃い	3.59(1.18)	-.067	.002	.038	-.100	.737	.025	.053	.020	.563
9. 顔の色が黒い	3.29(.95)	.096	-.156	-.086	.332	.350	.176	-.161	-.272	.405
〔VI. 大きな部位〕										
31. 口が小さい	3.11(.96)	.104	-.022	.083	.116	-.179	-.580	-.109	.488	.650
19. 鼻が大きい	3.36(.75)	-.079	-.007	.153	.136	-.161	.516	-.194	-.066	.382
27. 唇が厚い	3.11(1.08)	.055	.004	-.170	.042	.170	.498	-.082	-.091	.326
36. 黒目が大きい	3.89(.94)	-.159	-.005	.134	-.193	-.038	.466	.080	.181	.338
4. おでこが広い	3.15(1.02)	-.067	.157	.177	.172	-.068	.244	.198	-.197	.232
〔VII. 健康的な顔立ち〕										
13. 顔の血色がよい	3.58(1.03)	-.274	.269	-.013	-.014	.017	.225	.479	.331	.538
35. 口もとがゆるんだ	2.54(1.08)	.048	.072	-.097	-.119	.078	.077	-.463	.037	.259
20. 目がつり上がっている	2.68(.98)	.116	-.118	-.219	.094	-.025	.106	.378	-.337	.352
28. 二目の間隔が長い	3.13(.68)	-.169	-.068	-.041	.029	.099	.002	-.372	.104	.195
7. 鼻の穴が小さい	3.35(.97)	.104	.091	-.092	-.182	.029	-.007	.205	.030	.105
〔VIII. ハの字形の眉〕										
30. 眉がハの字形である	3.13(.66)	.086	-.058	.006	.001	-.034	-.071	.005	.468	.236
10. えらが張っている	2.30(1.17)	-.087	-.104	.123	.139	-.132	-.032	.095	-.338	.195
因子固有値		2.521	2.153	2.060	1.983	1.690	1.685	1.412	1.235	14.739

N=100

初期説明率：52.8%； 固有値 ≥ 1.574

(2)性格特性尺度

①男性写真群

5 因子解から 2 因子解までが検討され、最も解釈可能な 3 因子解が採用された(初期説明率 55.0%, 初期固有値 ≥ 1.614)。これらの因子分析の結果を Table 5 に示す。

第Ⅰ因子は、高い活動性と意志の強さを表わす項目から構成されているので、“力強さ”と命名した。第Ⅱ因子は、他者に対する誠実さを示す項目が高い因

Table 5
性格特性尺度に関する因子分析(主因子法, 直交回転):
因子負荷量 —男性写真—

	平均値(SD)	I	II	III	h^2
〔Ⅰ.力強さ〕					
2.意欲的な	3.15(.95)	.837	.007	-.175	.731
12.消極的な	3.08(1.11)	-.813	-.119	.031	.676
1.卑屈な	2.84(.78)	-.766	-.135	.107	.616
4.自信のある	3.05(1.01)	.758	.094	.021	.584
9.うきうきした	2.70(.78)	.603	-.075	-.274	.444
7.社交的な	2.89(1.02)	.594	-.054	-.322	.459
16.短気な	2.60(1.04)	.419	-.182	.412	.378
〔Ⅱ.社会的望ましき〕					
14.親切的な	3.73(.84)	.078	.788	-.152	.650
13.感じのよい	3.49(.94)	.317	.692	-.387	.729
15.人のよい	3.79(.80)	.025	.671	-.326	.557
18.慎重な	3.71(.82)	-.232	.658	-.015	.487
17.責任感のある	3.59(.88)	.397	.567	-.042	.481
19.なまいきな	2.37(.89)	.309	-.407	.235	.316
3.軽薄な	2.15(.83)	.056	-.358	.198	.171
6.無分別な	2.55(.75)	-.163	-.358	.208	.198
20.恥かしがりの	3.41(.85)	-.231	.236	-.061	.113
〔Ⅲ.親しみにくい〕					
10.近づきがたい	2.95(.96)	-.131	-.210	.863	.806
11.かわいらしい	2.82(.82)	.125	.311	-.690	.588
5.親しみにくい	2.63(.99)	-.130	-.192	.575	.384
8.心のせまい	2.49(.82)	-.213	-.287	.372	.266
因子固有値		4.007	3.125	2.505	9.637

$N=73$

初期説明率: 55.0%; 固有値 ≥ 1.614

子負荷量を示しているのので、“社会的望ましさ”とした。第Ⅲ因子は、対人的接触のしやすさに関わる項目から構成され、“親しみにくさ”と命名した。これらの3因子は、林(1978 a, 1978 b)が提唱する対人認知の基本次元に対応している。

②女性写真群

4因子解から2因子解までを検討したところ、3因子解(初期説明率 56.4%，初期固有値 ≥ 2.186)と4因子解(初期説明率 61.6%，初期固有値 ≥ 1.033)で明

Table 6
性格特性尺度に関する因子分析(主因子法, 直交回転)の結果:
因子負荷量 一女性写真一

	平均値(SD)	I	II	III	k^2
〔Ⅰ.親しみやすさ〕					
13.感じのよい	3.62(.89)	.769	.220	.192	.677
15.人のよい	3.91(.78)	.768	-.112	.277	.679
10.近づきがたい	2.93(1.11)	-.710	-.286	.183	.619
5.親しみにくい	2.71(1.09)	-.703	-.390	.216	.693
14.親切的な	3.84(.76)	.701	.095	.216	.547
11.かわいらしい	3.21(.87)	.696	.014	-.070	.490
19.なまいきな	2.22(.96)	-.623	.193	-.085	.433
16.短気な	2.32(.98)	-.547	.261	-.221	.416
8.心のせまい	2.49(.70)	-.520	-.209	-.232	.368
9.うきうきした	2.54(.89)	.477	.414	-.184	.433
20.恥かしがりの	3.35(.94)	.473	-.421	-.036	.402
〔Ⅱ.力強さ〕					
2.意欲的な	3.26(.98)	.139	.739	.262	.634
1.卑屈な	2.89(.89)	-.139	-.734	-.028	.559
12.消極的な	3.19(1.13)	.028	-.687	.055	.476
4.自信のある	3.13(.85)	-.177	.612	.022	.406
7.社交的な	2.93(1.06)	.370	.560	.044	.452
〔Ⅲ.社会的望ましさ〕					
18.慎重な	4.10(.77)	-.215	-.167	.644	.489
17.責任感のある	3.97(.83)	.023	.256	.625	.457
6.無分別な	2.31(.91)	-.227	-.150	-.492	.316
3.軽薄な	1.98(.82)	-.170	.052	-.436	.222
		4.899	3.166	1.703	9.768

$N=100$

初期説明率: 56.4%; 固有値 ≥ 2.186

確な構造が得られたので、両方を採用した。これらの結果を Table 6, 7 に示す。

3 因子解については、男性写真群での 3 因子解とほぼ同様の構造を示したので、第 I 因子を“親しみやすさ”，第 II 因子を“力強さ”，第 III 因子を“社会的望ましさ”と命名した。ただし，“親しみやすさ”には、男性写真群の場合に“社会的望ましさ”を構成していた項目が含まれている（“感じのよい”，“人のよい”，

Table 7
性格特性尺度に関する因子分析（主因子法，直交回転）の結果：
因子負荷量 — 女性写真—

	平均値(SD)	I	II	III	IV	h^2
〔I. 誠実さ・心の広さ〕						
15.人のよい	3.91(.78)	.846	-.101	-.174	.131	.773
14.親切な	3.84(.76)	.797	.118	-.164	.051	.679
13.感じのよい	3.62(.89)	.638	.166	-.449	.180	.669
8.心のせまい	2.49(.70)	-.553	-.217	.169	-.130	.398
19.なまいきな	2.22(.96)	-.537	.226	.290	-.064	.428
16.短気な	2.32(.98)	-.446	.306	.274	-.252	.431
〔II. 力強さ〕						
2.意欲的な	3.26(.98)	.192	.757	-.081	.187	.651
1.卑屈な	2.89(.89)	-.101	-.718	.195	-.005	.564
12.消極的な	3.19(1.13)	.093	-.661	.164	.029	.473
4.自信のある	3.13(.85)	-.163	.615	-.005	.018	.405
7.社交的な	2.93(1.06)	.308	.535	-.280	.012	.460
20.恥かしがりの	3.35(.94)	.404	-.445	-.191	-.048	.400
〔III. 親しみにくさ〕						
10.近づきがたい	2.93(1.11)	-.282	-.126	.852	-.014	.822
5.親しみにくい	2.71(1.09)	-.372	-.268	.705	.098	.717
9.うきうきした	2.54(.89)	.202	.314	-.560	-.072	.458
11.かわいらしい	3.21(.87)	.482	-.066	-.502	-.018	.489
〔IV. 社会的望ましさ〕						
17.責任感のある	3.97(.83)	.061	.266	.021	.681	.539
18.慎重な	4.10(.77)	-.027	-.106	.336	.602	.487
3.軽薄な	1.98(.82)	-.104	.090	.125	-.552	.339
6.無分別な	2.31(.91)	-.316	-.175	-.019	-.422	.309
		3.497	2.943	2.551	1.500	10.491

$N=100$

初期説明率：61.6%； 固有値 ≥ 1.033

“親切的な”，“なまいきな”など）。

4 因子解では，3 因子解の“親しみやすさ”が第Ⅰ因子と第Ⅲ因子に分離した。第Ⅰ因子は，人物の内面的なよさを表わす項目から構成されているので，“誠実さ・心の広さ”と名づけた。第Ⅲ因子は，対人的接触のしやすさに関わる項目の負荷が高いため，“親しみにくさ”とした。残りの第Ⅱ因子と第Ⅳ因子については，3 因子解の場合と同様に，“力強さ”，“社会的望ましき”と命名した。

相貌特徴と性格特性との仮定された関連

相貌特徴因子と性格特性因子との関連を検討するために，相関分析と正準相関分析を行った。

(1)ピアソン相関

相貌特徴の因子得点と性格特性の因子得点と間のピアソン相関を算出した。これらを Table 8，9 に示す。

①男性写真群

有意な相関は，“凹凸のある顔立ち”と“力強さ”との間でしか認められなかった。

Table 8
相貌特徴因子と性格特性因子との関係：ピアソン相関 —男性写真—

	I . 凹 凸 の あ る 顔 立 ち	II . つ く り の 荒 い 顔	III . 健 康 的 な 顔 立 ち	IV . こ ち ん ま り し た 顔 立 ち	V . 太 い 眉	VI . し な や か な 髪 の 毛	VII . 面 長 の 顔
I . 力強さ	.383	.057	.159	.025	.123	.088	-.102
	$p=.001$						
II . 社会的望ましき	.137	.048	-.153	.126	.172	-.038	.039
III . 親しみにくさ	.118	.127	-.218	-.122	-.041	-.051	-.116
			$p=.064$				

$N=73$

Table 9
相貌特徴因子と性格特性因子との関係：ピアソン相関　－女性写真－

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
	ほっそりした輪郭	さわやかな顔立ち	鮮明な目もと	大人っぽい顔	太い眉	大きな部位	健康的な顔立ち	八の字形の眉
〔性格特性：4 因子解〕								
I. 誠実さ・心の広さ	-.273	.257	.032	-.299	.052	.117	-.081	.057
	$p=.006$	$p=.010$		$p=.003$				
II. 力強さ	-.191	-.011	.132	.091	-.080	.253	.280	-.016
	$p=.057$					$p=.011$	$p=.005$	
III. 親しみにくさ	.234	-.301	.020	.198	.012	.041	-.224	-.132
	$p=.019$	$p=.002$		$p=.048$			$p=.025$	
IV. 社会的望ましさ	.016	.165	-.169	.051	.045	.020	-.089	.033
			$p=.092$					
〔性格特性：3 因子解〕								
I. 親しみやすさ	-.318	.373	.015	-.357	.033	.045	.051	.123
	$p=.001$	$p=.001$		$p=.001$				
II. 力強さ	-.214	.042	.123	.067	-.086	.229	.324	.012
	$p=.033$					$p=.022$	$p=.001$	
III. 社会的望ましさ	-.022	.090	-.128	.036	.051	.078	-.162	-.008

$N=100$

②女性写真群

性格特性因子の4因子解，3因子解のいずれでも，“社会的望ましさ”は相貌特徴因子と有意な相関を示さなかった。しかし，他の性格特性因子は，相貌特徴因子との有意な関連をみせた。

性格特性4因子解の場合には，“誠実さ・心の広さ”と“親しみにくさ”は，いずれも“ほっそりした輪郭”，“さわやかな顔立ち”，“大人っぽい顔”との間で，有意な相関が認められた。“親しみにくさ”は，“健康的顔立ち”とも有意な相関を示した。また，“力強さ”は，“大きな部位”や“健康的な顔立ち”と有意な相関をみせた。

性格特性3因子解での分析をみると，“親しみやすさ”は，“ほっそりした輪

郭”，“さわやかな顔立ち”，“大人っぽい顔”との間で，有意な相関がみられた。“力強さ”は，3 因子解と同様に“大きな部位”や“健康的な顔立ち”と有意な相関を示した他，“ほっそりした輪郭”とも有意な関連をみせた。

(2)正準相関分析

相貌と性格との関連を全体的にみるために，相貌特徴因子と性格特性因子を対象とした正準相関分析を行った。

男性写真群では，有意な関連が認められなかった(正準相関係数 .478, $\chi^2_{(21)}=29.52$, $p=.102$)。

一方，女性写真群では，性格特性の 4 因子解，3 因子解のいずれの場合も第 2 正準変量までの正準相関係数が有意であった。これらの結果を Table 10 に示す。

まず，性格特性 4 因子解の結果をみる。第 I 正準変量については，相貌特徴では“ほっそりした輪郭”，“さわやかな顔立ち(負)”，“大人っぽい顔”の負荷が高く，性格特性では“誠実さ・心の広さ(負)”，“親しみにくさ”の負荷が高かった。第 II 正準変量の場合，相貌特徴では“大きな部位(負)”，“健康的な顔立ち(負)”，性格特性では“力強さ(負)”の結びつきがみられた。

次に，性格特性 3 因子解の結果を述べる。第 I 正準変量をみると，相貌特徴では“ほっそりした輪郭(負)”，“さわやかな顔立ち”，“大人っぽい顔(負)”の負荷が高く，性格特性では“親しみやすさ”の負荷が高かった。第 2 正準変量については，“健康的な顔立ち(負)”と“力強さ(負)”の結びつきがみられた。

これらで得られた関係は，すべて先の相関分析でも有意と認められた関係であり，関係の方向も一致している。

刺激人物によって自己報告された孤独感および自尊心と相貌特徴および性格特性との関連

あらかじめ測定した刺激人物自身の孤独感と自尊心が，写真の観察者によって知覚された相貌特徴やそれに伴って推測された性格特性と，どのような関係にあるかを検討した。

(1)ピアソン相関

事前に測定された孤独感得点と自尊心得点，相貌特徴因子得点や性格特性因子得点と，どのような相関を示すかをピアソン相関を算出して検討した。これらの結果を Table 11 に示す。

Table 10
相貌特徴因子と性格特性因子との関係：
正準相関分析 一女性写真一

	〈正準変量：標準化係数〉	
	I	II
〔相貌特徴因子〕		
I. ほっそりした輪郭	.581	.171
II. さわやかな顔立ち	-.580	.336
III. 鮮明な目もと	-.024	-.360
IV. 大人っぽい顔	.450	-.286
V. 太い眉	-.036	.228
VI. 大きな部位	-.142	-.428
VII. 健康的な顔立ち	-.245	-.608
VIII. 八の字形の眉	-.196	.061
〔性格特性因子：4 因子解〕		
I. 誠実さ・心の広さ	-.632	.226
II. 力強さ	-.237	-.903
III. 親しみにくさ	.660	-.062
IV. 社会的望ましさ	-.052	.370
正準相関係数 I : .640 ($\chi^2_{(32)}=82.44, p=.001$)		
II : .458 ($\chi^2_{(21)}=33.64, p=.040$)		
	〈正準変量：標準化係数〉	
	I	II
〔相貌特徴因子〕		
I. ほっそりした輪郭	-.571	.118
II. さわやかな顔立ち	.564	.281
III. 鮮明な目もと	.068	-.292
IV. 大人っぽい顔	-.470	-.357
V. 太い眉	.021	.232
VI. 大きな部位	.162	-.365
VII. 健康的な顔立ち	.246	-.686
VIII. 八の字形の眉	.192	.028
〔性格特性因子：3 因子解〕		
I. 親しみやすさ	.929	.349
II. 力強さ	.347	-.893
III. 社会的望ましさ	-.007	.308
正準相関係数 I : .644 ($\chi^2_{(24)}=75.30, p=.001$)		
II : .452 ($\chi^2_{(14)}=25.45, p=.030$)		

N=100

Table 11

写真人物によって自己報告された孤独感および自尊心，相貌特徴の知覚，
および推測された性格特性との関連： ピアソン相関

	短期的孤独感	長期的孤独感	自尊心
【男性写真群(N=73)】 〔相貌特徴因子〕			
V. 太い眉	-.245 $p=.037$	-.135	.129
【女性写真群(N=100)】 〔相貌特徴因子〕			
II. さわやかな顔立ち	-.218 $p=.029$	-.091	.141
V. 太い眉	.180 $p=.073$.166 $p=.099$	-.216 $p=.031$
VII. 健康的な顔立ち	.131	.211 $p=.035$.047
〔性格特性因子：4 因子解〕			
II. 力強さ	.170 $p=.091$.195 $p=.052$	-.052
III. 親しみにくさ	.081	-.064	-.181 $p=.072$
〔性格特性因子：3 因子解〕			
I. 親しみやすさ	-.110	.063	.177 $p=.079$
II. 力強さ	.149	.196 $p=.051$	-.012

(注)少なくとも有意水準が10%を充たす因子の結果のみを記す。

①男性写真群

相貌特徴の“太い眉”と短期的孤独感得点との間に有意な相関が認められただけであった。短期的に孤独に陥っている者は、眉が太くないと知覚される傾向にある。

②女性写真群

女性の場合もあまり明確な結びつきはみられなかった。相貌特徴の“さわやかな顔立ち”が短期的孤独感得点，“健康的な顔立ち”が長期的孤独感得点，“太い眉”が自尊心得点と，それぞれ，有意な相関を示した。

(2)一元分散分析

刺激人物の孤独感水準あるいは自尊心水準を選別し，相貌特徴因子得点および性格特性因子得点におよぼす影響を一元分散分析によって検討した。

①孤独感水準

Gerson & Perlman (1979)に従って，短期的孤独感得点と長期的孤独感得点のそれぞれの分布に基づき(男性写真群(N=73)－短期的孤独感得点： $X=37.77$ ， $SD=9.08$ ；長期的孤独感得点： $X=36.69$ ， $SD=9.42$ ／女性写真群

($N=100$)—短期的孤独感得点： $X=35.88$, $SD=7.98$ ；長期的孤独感得点： $X=36.08$, $SD=7.69$), 孤独感の3水準に刺激人物を分割した(それぞれで平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差を基準とした)。さらに, 短期的孤独感水準と長期的孤独感水準を組み合わせ(男性写真—短期的孤独感：23～33点, 34～42点, 43～60点；長期的孤独感：20～31点, 32～41点, 42～59点／女性写真—短期的孤独感：21～31点, 32～39点, 40～57点；長期的孤独感：21～32点, 33～39点, 40～55点), a) 孤独感水準が慢性的に低い刺激人物, b) 中程度である刺激人物, c) 慢性的に高い刺激人物を選別した。

男性写真群と女性写真群のそれぞれで, これら3群を独立変数とし, 相貌特徴因子得点と性格特性因子得点を従属変数とする一元分散分析を試みた。これらの結果を Table 12 に示す。

Table 12
相貌特徴の知覚と性格特性の推測におよぼす刺激人物の慢性的孤独感の影響：
条件別平均値と一元分散分析の結果

【男性写真群】	低-孤独群 $N=20$	中-孤独群 $N=13$	高-孤独群 $N=20$	一元分散分析の結果 ($df=2/50$)
〔相貌特徴因子〕				
I. 凹凸のある顔立ち	-.032(.908)b	.658(.785)a	-.190(.849)b	$F=4.119$ $p=.022$
【女性写真群】	低-孤独群 $N=26$	中-孤独群 $N=19$	高-孤独群 $N=21$	一元分散分析の結果 ($df=2/63$)
〔相貌特徴因子〕				
III. 鮮明な目もと	-.099(.938)	.460(.850)	-.105(.956)	$F=2.521$ $p=.089$

(注1) 少なくとも有意水準が10%を充たす因子の結果のみを記す。

(注2) 異なる英小文字は, 5%水準で互いに有意に異なることを示す(最小有意差法)。

男性写真群と女性写真群ともに, 刺激人物の慢性的孤独感水準の有意な影響はほとんど検出されず, 男性写真群の“凹凸のある顔立ち”でのみ有意な影響が認められた。つまり, 孤独感が慢性的に中程度である者は, 他の者よりも, 凹凸のある顔立ちをしていると知覚される傾向にあった。

②自尊心水準

刺激人物の自尊心得点の分布に基づき(男性写真群($N=73$): $X=32.93$, $SD=7.41$ ／女性写真群($N=100$): $X=30.01$, $SD=6.19$), 自尊心の3水準に刺激人物を分割した(それぞれで平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差を基準とした)／男性写真群：16～29点, 30～36点, 37～50点；女性写真群：12～26点, 27～33

Table 13

相貌特徴の知覚と性格特性の推測におよぼす刺激人物の自尊心の影響：
条件別平均値と一元分散分析の結果

【男性写真群】	低-自尊心群 N=26	中-自尊心群 N=20	高-自尊心群 N=27	一元分散分析の結果 (df=2/70)
〔相貌特徴因子〕				
VII. 面長の顔	-.171(.834)	.345(.861)	-.091(.821)	F=2.400 p=.098
【女性写真群】	低-自尊心群 N=26	中-自尊心群 N=46	高-自尊心群 N=28	一元分散分析の結果 (df=2/97)
〔相貌特徴因子〕				
III. 鮮明な目もと	-.141(.971)ab	.244(.869)a	-.270(.791)b	F=3.441 p=.036
〔性格特性因子：4因子解〕				
III. 親しみにくさ	.333(1.031)	-.093(.885)	-.156(.791)	F=2.449 p=.092
IV. 社会的望ましき	.021(1.084)	-.180(.654)	.276(.827)	F=2.629 p=.077
〔性格特性因子：3因子解〕				
I. 親しみやすさ	-.237(1.057)	-.054(.921)	.310(.868)	F=2.406 p=.096
III. 社会的望ましき	.125(1.129)	-.220(.719)	.246(.768)	F=2.960 p=.057

(注1)少なくとも有意水準が10%を充たす因子の結果のみを記す。

(注2)異なる英小文字は、5%水準で互いに有意に異なることを示す(最小有意差法)。

点、34～43点)。

男性写真群と女性写真群のそれぞれで、これら3群を独立変数とし、相貌特徴因子得点と性格特性因子得点を従属変数とする一元分散分析を行った。これらの結果をTable 13に示す。

この分析でも、孤独感の場合と同様に、刺激人物の自尊心水準の有意な影響はほとんどみられなかった。女性写真群の“鮮明な目もと”のみで有意な影響が見出された。自尊心の高い者がこの特徴に欠けると判断される傾向にあった。その他、女性写真群では、10%水準であるが、自尊心の高い刺激人物が親しみやすく、社会的に望ましい性格をもつと推測される傾向性もみられた。

IV. 考 察

相貌特徴と性格特性との仮定された関連性

本研究では、女性被験者に男性写真あるいは女性写真を呈示し、相貌特徴を評定させ、性格特性を推測させた。因子分析によると、相貌特徴の知覚や性格特性の推測の際に、刺激人物の性別によって、少し異なる枠組みが用いられていることが示された。

まず、相貌特徴の知覚の共通点と差異について考察する。刺激人物の性別にかかわらず、抽出された因子は、“太い眉”であった。“健康的な顔立ち”も構成項目に差異があるが、共通に命名された因子である。さらに、男性写真での“つくりの荒い顔”と女性写真での“大きな部位”，男性写真での“しなやかな髪の毛”と女性写真での“さわやかな顔立ち”も構成項目からある程度の対応を認めることができる。残りの因子は、それぞれの性で特有であるといえる。男性写真で特有に出現している因子は、顔の全体的なつくりを表わす因子と思われる（“凹凸のある顔立ち”，“こぢんまりした顔立ち”，“面長の顔”）。他方，女性写真では，女性の魅力にとって重要な特徴がそれぞれ因子を構成している（“ほっそりした輪郭”，“鮮明な目もと”，“大人っぽい顔”，“ハの字形の眉”）。

写真の性別にかかわらず，相貌特徴は，個別の部位の特徴を表わす因子よりも，全体的特徴を示す因子が相対的に多く出現した。また，性格推測時に，被験者は顔全体の印象を重視していた。これらは，個々の部位の特徴の知覚の集積よりも，いわばゲシュタルト的知覚が生起していることを示唆する。本研究では，相貌特徴の知覚を個々の部位の特徴の水準から捉えようとしたが，これは必ずしも妥当でないかもしれない。また，実際に計測された顔の形態指標（大坊ら，1994）と相貌特徴の知覚との対応に関する研究も必要といえる。

性格特性次元についても共通点と差異がみられた。刺激人物の性別にかかわらず，抽出された因子は，林（1978 a, 1978 b）が提唱する対人認知の基本次元に対応している。しかし，刺激人物の性別によって，次のような興味深い差異がみられた。男性の刺激人物の性格特性を推測するときには“力強さ”や“社会的望ましき”の軸が，女性の刺激人物の場合には“親しみやすさ”の軸が，それぞれ顕在化する。さらに，後者の場合には，“親しみやすさ”が分離した4因子解も得られたことから，女性被験者が女性の刺激人物をみるとときには，少し複雑な見方をするとはいえよう。

次に，相貌特徴の知覚と性格特性の推測との関連についての結果を考察する。刺激人物が女性であるときにはその関連が明確に現われたが，男性の刺激人物の場合にはその関連が希薄であった。男性写真の場合，ピアソン相関分析では，凹凸のある顔立ちをした男性が力強い性格であると推測される傾向を示す有意な相関が得られた。しかし，正準相関分析では何の有意な傾向も認められなかった。

他方，刺激人物が女性の場合には，ピアソン相関分析で有意な相関が顕著に認められ，正準相関分析においても相貌特徴と性格特性との有意な関連がみら

れた。ピアソン相関分析と正準相関分析での結果はほぼ対応していたので、ここでは正準相関分析の結果を中心に考察する。正準相関分析では、親しみやすさ(4因子解では“誠実さ・心の広さ”と“親しみにくさ”)を推測させる相貌特徴と力強さを推測させる相貌特徴とが明確に浮かび上がった。輪郭がほっそりしておらず、顔立ちがさわやかで、大人っぽくないほど、親しみやすい人物だと判断される。顔立ちが健康的であり、顔の部位が大きめであると、力強いという印象が形成される。女性人物の知覚において中心となる“親しみやすさ”は、女性特有の相貌特徴である“ほっそりした輪郭”や“大人っぽい顔”から推測される。

相貌特徴と性格特性との関連における刺激人物の性差の原因として、次の2つを指摘できる。a)被験者と刺激人物との性別の一致・不一致、b)相貌特徴の情報的価値が男女で異なる。まず、a)について説明する。女性の被験者が女性つまり自分自身と同質である刺激人物を見る場合には、同性の同輩との関係の中で日常的に培われた外見と内面との関連に関する仮定が適用されるだろう。自分自身と同質である人物の内面的特徴が直感的に仮定されやすいからである。対照的に、男性つまり自分自身と異質である刺激人物については、外見と内面との関連に関する仮定が行われにくいのかかもしれない。自分自身と異質である人物の内面的特徴については理解が困難であるからである。

次に、b)について説明する。“男は度胸、女は愛嬌”という言い回しに代表されるように、伝統的性役割観に基づく、女性では相貌特徴が重視され内面との強い関連が仮定される(“What is beautiful is good”, Berscheid, & Walster, 1974)。ところが、男性では、相貌的特徴よりも社会的属性(地位、職業、学歴など)が情報的価値をもつ。つまり、この考えによると、男性については相貌特徴から内面を推測する必要があまりないので、暗黙の性格理論のメカニズムの中に、男性に関する相貌特徴と性格特性との仮定された関連図式は形成されにくいのかかもしれない。しかし、女性については、化粧に象徴されるように、外見と内面との明確な関連図式が暗黙の性格理論のメカニズムに存在すると思われる。しかし、身体的魅力ステレオタイプに関するメタ分析を試みた Eagly, Ashmore, Makhijani, & Longo (1991)によると、刺激人物の性別にかかわらず、身体的魅力ステレオタイプが出現する。しかも、彼らの研究では、本研究の場合と同様に、被験者と刺激人物との間に相互作用期待が存在しない研究に対象が限定されている。また、髪の毛の染色やピアスに象徴されるように、若者の間では男性も相貌特徴を重視する風潮も現われている。したがって、このb)の

説明も検討の余地があるだろう。いずれにせよ、a)とb)のいずれの説明も、刺激人物の性別と被験者の性別を同時に操作した研究によってさらに検討されるべきであろう。

ところで、本調査では、刺激写真の性別にかかわらず、“社会的望ましさ”を推測させる相貌特徴が出現しなかった。男性の刺激人物については、先の説明a)やb)で解釈できるだろう。女性の刺激人物の場合には、次のように考えられるかもしれない。先述したように、女性の内面を推測する際には、“社会的望ましさ”という軸はあまり中心的でなく、そのため、相貌特徴との関連を仮定する必要があまりないと思われる。Eagly *et al.* (1991)のメタ分析では、身体的魅力ステレオタイプが特定の評価次元(社会的有能性)で顕著に現われることが見出された。相貌特徴と密接な関連が仮定されている性格特性次元とそうでない次元があると彼らの知見を一般化して考えると、本研究での傾向と対応するように思われる。しかしながら、女性の被験者に女性の刺激人物を判断させている林ら(1977)の研究では、“ほっそりして目鼻立ちの整った”や“口元のしまりのなさ(負)”という相貌特徴から“社会的望ましさ”が推測されることが認められている。したがって、この問題は、今後も検討すべきであろう。

孤独な顔の検知

本研究では、写真の刺激人物自身によって評定された孤独感や自尊心の水準が、写真の知覚者による相貌特徴や性格特性の評定とどのような関連を示すかも検討した。全体的には、これらの関連はかなり希薄であった。しかしながら、次のような傾向もみられた。

相関分析では、短期的に孤独に陥っていると報告した男性は、“太い眉”という相貌特徴に欠けることを示す有意な相関が得られた。女性の場合には、a)短期的に孤独に陥っている女性が“さわやかな顔立ち”という特徴に欠け、b)長期的に孤独状態にある女性が“健康的な顔立ち”をしており、さらに、c)自尊心の高い女性は“太い眉”という特徴をもたない。b)やc)の傾向については、直観的關係と逆である。

慢性的孤独水準による分析では、男性写真の“凹凸のある顔立ち”でのみ有意な差異が見出された。孤独感が慢性的に中程度である男性は、他の者よりも凹凸のある顔立ちをしていると知覚された。自尊心水準による分析では、女性写真の“鮮明な目もと”でのみ有意な群差があり、自尊心が高い者がこの特徴に欠けると判断される傾向にあった。しかしながら、これらの傾向はあまり意

味があるとは思えない。

したがって、わずかながら認められた有意な傾向もあまり積極的に意味をもつとはいえず、刺激人物自身の孤独感や自尊心が顔を通して観察者に何らかの仕方で伝えられたとは思われない。本調査の結果から、作業モデル(Fig. 1)自体が妥当でないと結論することもできる。しかし、ここでは、作業モデルを前提として、本調査でそのような関連が生じなかった理由を考えよう。1つめの理由として、顔の判断における対比効果を挙げることができる。本調査では、1人の被験者に1名の刺激人物を呈示しただけであった。したがって、暗黙の性格理論のメカニズムがうまく活性化されなかったと考えられる。複数の写真を呈示することによって、それぞれの相貌特徴が際立ち、刺激人物の内的傾性と対応した知覚や推測が起こるかもしれない。Eagly *et al.* (1991)のメタ分析でも、被験者間要因計画より被験者内要因計画を用いた研究で、強い身体的魅力ステレオタイプが得られることが示されている。また、慢性的孤独水準の高い者と低い者をあらかじめ選別し、それぞれを呈示したほうがよかったかもしれない。2つめの理由として、本調査で使用した写真では無表情の顔が用いられたことが考えられる。つまり、本人が孤独な状態にあるかどうかは、何らかの情動を表出する際に弁別的に差異が生じるかもしれない。

ところで、Eagly *et al.* (1991)のメタ分析では、今までに触れた他に、次の知見が得られている。a)身体的魅力以外の刺激人物に関する情報が存在するときや、b)被験者が正確な印象を形成するように教示されているときには、身体的魅力ステレオタイプが弱まる。a)に関しては、エプロン状の布を首より下にあてて撮影され、眼鏡着用者はあらかじめ除いてあるので、服装に関する暗黙の性格理論の働き(Kaiser, 1985)は抑えられる。さらに、刺激人物についての説明は一切行われていないことから、相貌特徴の情報の効果が最大となったはずである。b)については、印象形成に関する基礎的データ収集の研究であると被験者には伝えただけである。調査が講義を利用して行われたことを考えると、被験者は、“正確さ”が要求されていると感じたかもしれない。そうすると、相貌特徴の効果は生起しにくくなる。つまり、正確さを求める構えをできるだけとらないような工夫をすることが必要だろう。

<注>

- (1)本研究で使用した写真の撮影にあたっては、次のような倫理上の注意が払われた。つまり、質問紙調査や実験での被験者によるデータ提供と異なり、顔写真が後になって他の被験者

に曝されるからである。そのため、事前に写真撮影の目的(“顔の認知”に関する研究)を説明し、心理学研究以外には使用しないことを伝えた。そのうえで、撮影を拒んでも成績には何も影響しないことも確認された。なお、撮影を承諾した者には、謝礼として、撮影した写真が渡された。

- (2)本研究で呈示した前半のデータは、筆者の指導の下で志水竜一君と村山由美嬢が卒業論文研究(社会学科平成6年度提出“顔の認知に関する社会心理学的研究(1)・(2)―相貌と性格との仮定された関連性―”)のために収集した。彼らの多大な努力に感謝します。
- (3)本研究での前半の結果は、和田 実先生(東京学芸大学教育学部)が主宰されている電子メール・システム TSN で“発表”した。貴重なコメントを頂いたネットワーク成員に感謝します。また、名古屋社会心理学研究会(1995年5月13日;名古屋大学教育学部)で研究全体を紹介した。その際、出席者の方々に、今後の研究のための種々の示唆を与えて頂いた。
- (4) E-mail: moroi@hss.shizuoka.ac.jp

V. 引用文献

- Berscheid, E., & Walster, E. 1974 Physical attractiveness. *Advances in Experimental Social Psychology*, 7, 157-215.
- Bruch, M.A., Kafrowitz, N.G., & Pearl, L. 1988 Mediated and nonmediated relationships of personality components to loneliness. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 6, 346-355.
- Bruner, J.S., & Tagiuri, R. 1954 The perception of people. In G. Lindzey (Ed.), *Handbook of social psychology*, vol. II, Reading, Mass.: Addison-Wesley. Pp. 634-654.
- Chelune, G.J., Sultan, F.E., & Williams, C.L. 1980 Loneliness, self-disclosure, and interpersonal effectiveness. *Journal of Counseling Psychology*, 27, 462-468.
- 大坊郁夫・村澤博人・趙 鏞珍 1994 魅力的な顔と美的感情―日本と韓国における女性の顔の美意識の比較 感情心理学研究, 1, 101-123.
- Eagly, A.H., Ashmore, R.D., Makhijani, M.G., & Longo, L.C. 1991 What is beautiful is good, but...: A meta-analytic review of research on the physical attractiveness stereotype. *Psychological Bulletin*, 110, 109-128.
- Gerson, A.C., & Perlman, D. 1979 Loneliness and expressive communication.

- Journal of Abnormal Psychology*, **88**, 258-261.
- 林 文俊 1978 a 相貌と性格の仮定された関連性(3)－漫画の登場人物を刺激材料として－ 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 41-55.
- 林 文俊 1978 b 対人認知の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **25**, 233-247.
- 林 文俊・津村俊充・大橋正夫 1977 顔写真による相貌特徴と性格特性の関連構造の分析 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **24**, 35-42.
- Jones, W.H., Freeman, J.E., & Goswick, R.A. 1981 The persistence of loneliness: Self and other determinants. *Journal of Personality*, **49**, 27-48.
- Jones, W.H., Hobbs, S.A., & Hockenbury, D. 1982 Loneliness and social skill deficits. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 682-689.
- Jones, W.H., Sansone, C., & Helm, B. 1983 Loneliness and interpersonal judgments. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**, 437-441.
- Kaiser, S.B. 1985 *The social psychology of clothing and personal adornment*. Macmillan Publishing Company. (『被服と身体装飾の社会心理学－装いのこころを科学する－〔下巻〕』高木 修・神山 進監訳 1994 北大路書房)
- 諸井克英 1991 生活事態変化に伴う孤独感 人文論集(静岡大学人文学部社会科学・人文学科研究報告), **41**, 29-63.
- 大橋正夫・三輪弘道・長戸啓子・平林 進 1972 写真による印象形成の研究－序報－ 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **19**, 13-25.
- 大橋正夫・長戸啓子・平林 進・吉田俊和・林 文俊・津村俊充・小川 浩 1976 相貌と性格の仮定された関連性(1)－対をなす刺激人物の評定値の比較による検討－ 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **23**, 11-25.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- Russell, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. 1980 The Revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 472-480.
- Solano, C.H., Batten, P.G., & Parish, E.A. 1982 Loneliness and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 524-531.
- Solano, C.H., & Koester, N.H. 1989 Loneliness and communication

- problems: Subjective anxiety or objective skills? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 15, 126-133.
- Spitzberg, B.H., & Canary, D.J. 1985 Loneliness and relationally competent communication. *Journal of Social and Personal Relationships*, 2, 387-402.
- 鈴木昭弘・渡辺昭一・足立浩平 1988 顔写真の意味空間に関する因子分析的研究 科学警察研究所報告(法科学編), 41, 46-55.
- Williams, J.G., & Solano, C.H. 1983 The social reality of feeling lonely: Friendship and reciprocation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 9, 237-242.